

ねっとわあく

2018/10/31 Vol.71

あなたは何色？

カラフルに
もつと

目次

- 大学生の私が感じたこと 2
- 当事者からあなたへ 大切な人に寄り添うということ 3
- みんなに知ってもらいたいLGBT・SOGIのこと 7
- 静岡から発信これからの性的マイノリティと防災 9
- 養護教諭ができること 11
- 思いを伝える～新たなメディアと性的マイノリティ～ 12
- もつとつながろう
静岡県内で活動するLGBT関連団体を紹介します 13

もっとカラフルに あなたは何色？

今号では、LGBT、性的マイノリティをテーマに、「セクシュアリティ」について考えてみたいと思います。

皆さんの中には、性を公に語ることに、「居心地が悪い」と感じる人がいるかもしれません。しかし、これは「ベッドの中の話」ではありません。「誰もが自分らしく生きるための人権の話」なのです。現在の日本で、LGBTをはじめとする性的マイノリティの人々は、人口の7.6%、13人に1人いると言われています。決して「私の周りにはいない」存在ではありません。

これまで、性の概念は、男と女の「性別二元論」で考えられてきました。今でも私たちはそれを当たり前として教育を受け、社会生活を送っています。この日本では、社会の中に過半数存在する女性でさえ、未だに生きづらさや困難を抱えているのが実情です。国の方針により、様々な施策がとられていることを見れば一目瞭然でしょう。

であるならば、さらに少数の性的マイノリティの人々は、よりいっそうの差別や問題に直面していると想像できるのではないのでしょうか。

「第2次静岡県男女共同参画基本計画」(2011年2月策定)を具体的にした「第3期実践計画」(2018年3月策定)には、2018年から2020年の実施計画として、「性同一性障害などを有する人に関する人権尊重の啓発」について、以下のように明記されています。「性的指向を理由として困難な状況に置かれている人々や性同一性障害などを有する人々に対し、人権尊重の観点から配慮が必要であり、このための人権教育・啓発を進めます」

これまで、性的マイノリティの人々に思いを巡らせる機会がありましたか？ 今回紹介する当事者や家族の声、支援する人々の話などから、多くの人に性的マイノリティの人々のことを知ってほしい、理解を深めてほしいと思います。そして、それが次の一歩につながっていくことを期待します。

今号は、LGBTの象徴である6色のレインボーカラーや、多様性を表すグラデーションを参考にタイトルを決めました。もし、全ての人が途切れず続く色の中に存在するとしたら「自分は何色の辺にいるのだろうか？ 色で表したら何色になるのだろうか？」と想像してみてください。

性の多様性を表現する方法は様々です。色やスペクトラム、ピクトグラム※での表現は、全ての人に当てはまらないかもしれません。人によっては、自分にピッタリとくるものがない、と感じる人もいるでしょうし、当てはめられたくないと思う人もいるかもしれません。

しかし、もしも、自由で豊かな表現方法として、一人ひとりがあるんな色で自分を表現したなら、この世界はよりカラフルで多様性に満ちたものになるはずです。人の数だけある多様なセクシュアリティを認め合っていくことが、みんなで共に歩むためにできることの第一歩なのかもしれません。

※スペクトラム…物事や概念の範囲、連続性を図や線を用いて視覚的に表現したもの。

ピクトグラム…物事や概念、行動などをわかりやすく単純化し視覚的に表現したもの。

絵文字、視覚記号。

大学生の私が感じたこと

勝村 諒功

私の中にあつた「無関心」

大学生の私は、今まで、性的マイノリティの人々のことは全く知りませんでした。「当事者が自分の周りにはいない」と思っていました。いたのかもしれないが、無関心であつたために見えていなかったのが、本当のところなのかもしれません。そして当事者たちが、どんな悩みや困難を抱えているのか全く知らず、単に自分とはかかわりのない存在だと思っていました。

今回、「ねっとわあく」で「LGBT」について取り上げると決まった時、友人たちに、「LGBT」や「性的マイノリティ」についてどう思うか聞いてみました。何人に聞いても、返ってくる答えは「知らないからわからない、関係ない」というようなものでした。一時は、私もそれに同感でした。しかし、当事者やアライ(理解者・支援者)から話を聞き、いろんな出来事を知った今は違います。その経験を経て、自分自身の「無関心」に気づくことができました。

知らなければならぬ事

例えば、レズビアンやゲイ、バイセクシユアルの人たちは、心の性(性自認)と身体の性(生物学的性)が一致していませんが、同性が恋愛的・性的対象になり得ます(バイセクシユアルは同性、

異性両方)。しかし「異性愛が普通である」という社会の中で、そのあり方は「特別なもの」とされ、多くの当事者たちは自分の悩みを打ち明けにくく、苦しんでいることを知りませんでした。ここで問題となるのは、「異性愛が普通である」と考える人たちが、同性愛に対して、「自分たちの異性愛とは別物である」と思い込んでしまっていることだと思えます。

また、トランスジェンダーの人たちは、心の性(性自認)と身体の性(生物学的性)の違いからくる違和感で悩んでいると知りました。「心と身体の性が一致する」あり方とは違うため、誰にも相談できずに抱え込んでしまいうことも多いそうです。

性的マイノリティに興味・関心がないマジョリティ(多数派)の人たちが、「異性愛だけが恋愛の形ではない」「心と身体の性が必ずしも一致するとは限らない」ということを理解し、性的マイノリティについて学び、アライになつたとします。アライが増えることで、性的マイノリティの人たちの抱えている悩みや問題は、少なからず改善されていくと思います。そして多くの人が、「異性愛だけが恋愛の形ではない」「心と身体の性が必ずしも一致するとは限らない」ということを、当たり前に思える世の中にならなければいけないと思いませんか。

以前の私も含めて、性的マイノリティのことを知らない人が、まだとても多いのが現状です。これでは当事者

への理解は一向に進みません。「好きな人と籍を入れる」「心の性別と同じ戸籍の性別で生活する」などが当たり前だと決めつけていては、何も生まれません。

カラフルな世界へ

マジョリティ側とマイノリティ側で、有する権利が違っていないはずがありません。そもそも、マジョリティもマイノリティもないのです。皆人間で、個性があつて、それぞれが違っていることが認められる世界は、すばらしいと思います。

性の多様性が認められる社会を作るには、その社会を構成する全員がその多様さに気づき、理解し、認め合っていく必要があります。この心がけは、小さな一歩かもしれないませんが、世の中を変える一歩となる可能性があります。

それぞれの心にもう少し、今とは違うカラーを思い描いてみませんか。その先には必ず、今よりももっとカラフルで豊かな世界が待っています。



当事者からあなたへ 大切な人に寄り添うということ

インタビュー



トランスジェンダーの永田怜さんは、明るくさわやかな笑顔が印象的な青年だ。仕事に励み、トランスジェンダー当事者としても積極的に活動している。そんな怜さんは、どのように育ってきたのだろう。

今回は怜さんのお母さんに、怜さんの子ども時代や母親として感じてきたことについてあらかじめ書面で回答してもらった。怜さんには、その回答を踏まえ、子ども時代のエピソードやこれからについて語ってもらった。

男性として生きる一人のトランスジェンダーの半生を、親と当人の視点から俯瞰するインタビュー。望みどおりの生き方を目指し、多様な生き方を認めあう、豊かな社会を実現するためのヒントを探そう。

(藁科可奈)

永田怜（ながたれい）さん

1993（平成5）年静岡県生まれ。25歳。幼少期からピアノに親しみ、数々のコンクールに出場。スポーツも万能で、ソフトテニス、スキューバダイビングなどをたしなむ。高校を卒業した春にトランスジェンダー（FTM）であることを両親にカミングアウト。ホルモン治療および性別適合手術を受け、2018（平成30）年4月に戸籍を男性に変更。看護師。浜松国際総合事務所LGBT支援担当。

「周りの子と比べて自分は違うな」とずっと感じていた

母 『怜は幼稚園の頃から女の子とままごとをするよりも、男の子と遊ぶ方が楽しかったようです。小学生の頃は男子とも女子とも仲が良く、活発に学校生活を送っていました』

怜 小学校入学時は、ランドセルの赤い色が嫌で泣いていました。今の子はランドセルが色とりどりで、選択肢が多くてうらやましいです。

— 今だったら何色のランドセルを選びますか？ —

怜 もちろん黒ですね。「周りの子たちと比べて自分は違う」と感じていたけど、自分でもなぜ赤いランドセルが嫌なのかわかりませんでした。

僕は兄のおさがりの服を着ることがうれしかったのですが、次第に周りの目が気になって。「みんなみたいにしないで」と、嫌だったけど義務感で女の子の服を着ていました。

高学年になると周囲で恋愛の話題が出るようになって、僕も仲の良かった男子全員にバレンタインチョコをあげました。周囲の女子に話題を合わせるために、特定の男子が気になるふりもしていました。

親にも友人にも言えない初めての恋

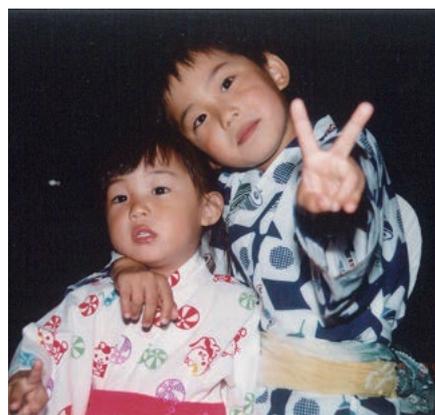
母 『怜は男勝りの女の子なのだと思っていました。中学生で生理が始まったときは、親としてなぜだか少し安心しました。ところが怜はすごく嫌そうで、下着が汚れてしまうと不機嫌になりま



4歳、自宅の前



3歳、庭でプール遊び



2歳、仲良しの兄と盆踊り



8歳、ピアノの発表会

した（今となればもつとケアしてあげべきだったのに、と思います）、トランスジェンダーに関する情報もなく、ケアする方法もわかりませんでした。」

中学2年生までは、怜は自分から、私や夫に話しかけてくれる素直な子どもでした。中3の頃、ぼんやり悩んでいる姿を見かけるようになり、私が「思春期特有の悩みを抱えているんだと思ひ込んで、見守っていました。」

—中学生の頃は何に悩んでいたのですか？—

怜 どんどん成長し身体が変化していった時期で、違和感も強くなっていきました。お風呂で自分の胸を殴っていましたね。何人かの男子とお付き合いをしましたが、違うと感じて心から好きにはなれず、そのことは、親にも仲のいい友達にも言えませんでした。そして、3年生の時にソフトテニス部の後輩の女

子と仲良くなって、僕はその子に恋をしたんです。その頃から、自分は何なんだろうと考え込むようになりました。

中学卒業間際に、その後輩から「つき合ってください」と書かれた手紙をもらいました。自分の本心は彼女のこととがすごく好きで交際したかったのですが、その場に居合わせた友だちに「それってレズじゃん」と突っ込まれてしまつて…。周りからどんな風に思われるか気になり、彼女には何も返事ができず、それっきりになってしまいました。

悩むわが子を見守り続けた

母 『高校時代の怜は悲しみのどん底で、本当に辛い時期だったのだと思います。私もどう対応していいのか迷っていました。進学校に入學し、周りをはじめに勉学に取り組む生徒が多かったので、怜の悩みはとも口に出せる状況ではなかったでしょう。その上、思春期から大人へ向かう段階に入り、怜は自分の存在価値が見いだせなくなつていったと思います。それでも、まだ私には何も言わず隠し通して、私も全く気づかずにいました。男子とお付き合いいし、自宅に一、二度連れてきたこともありましたが…。親にも友だちにも、自分の本心を気付かれないよう無理をしていたのでしょね。今となっては本当に申しわけなく思います。怜が部屋でふさぎ込んでいると、親としては心配でたまりませんでした。本人に聞いたことはしませんでした。怜が私たちに悩みを打ち明けてくれたのは、高校を卒業してからでした』



9歳、小学3年生のころ

心の拠り所はネット上のつながり

怜 高校時代はひたすら悩み、勉強も部活も一切身が入らなくなり、性同一性障害の当事者のブログに書いてあることが自分と一致すると気づいて、僕は男性として女性が好きなんだと自覚しました。やつと自分の中のモヤモヤが何か分かってホッとした気持ちの一方で、誰にも言えない秘密を抱えて、自暴自棄になりました。この社会では絶対に男性として生きてはいけないうし、親に本当のことを伝えたら見放されると思っていました。なんとか頑張つて男性と付き合えば、将来結婚もできて親も喜ぶんじゃないかと考えました。そして、試してみたけど全然だめで、もつと落ち込みました。

—その状況からどのように抜け出したのですか？—

怜 現実には、高校を卒業するまで孤独でした。しかし、高校2年生くらいから匿名で性同一性障害の当事者としてブログを始めたことが心の拠り所になりました。ブログでは本当の自分をすべて出すことができたし、当事者の友だちともネット上で交流を深め、情報を得ることができました。治療を始めている人や、周囲に受け入れてもらっている人たちがネット上にはたくさんいて、自分もそんな生き方をしたいと思いました。

当事者仲間と養護の先生に救われた

怜 同じころ、ブログを通じて知り合ったトランスジェンダーの当事者と地元で会いました。僕よりも二つ年上のFTMの人でした。同じ立場の人が身近にいたことがすごくうれしかったです。親にどう伝えるか、周囲にどう接していくか、悩みを相談できてとても安心し、少しずつでも前進している気持ちになりました。

—怜さんが両親に打ち明けると決めたきっかけは何ですか？—

怜 高校を卒業する直前に、授業を抜け出して保健室に行きました。誰かに悩みを打ち明けたいと頭がパンクしそうでした。そんな状態の僕に、養護の先生が「ゆつくりでいいから、言いたいことがあったら言つてね」と声をかけてくれました。それで、「もしかしら自分には性同一性障害かもしれない」と、震えて泣きながら伝えました。すると先生は、以前も同じ悩みをもった生徒がいたと教えてくれました。僕にとって初めてのカウンセリングアウトでしたが、先生がただ

話を聞いてくれたことがうれしくて、僕みたいな人間がいてもいいんだと、認めてもらえた気がしました。

先生に、「悩みを親に伝えたいけど反対されそうで心配だ」と話したら、先生は「親はきっと理解してくれるし、ずっと子どもの味方でいてくれるから大丈夫だよ」と励ましてくれました。そのことがきっかけで、親にも伝えていいかなと思いました。

—教育現場で先生の生徒へのかかわり方は影響が大きいですね—

怜 そうですね。その先生からは僕の悩みを認めて受け入れようとしてくれていることが伝わってきて、僕は救われました。

両親へ長年の秘密を打ち明ける

母 『夫と私へのカミングアウトは2012年3月。高校卒業後すぐに、怜の気持ちを綴った手紙を渡されました。自分の言葉で小さい時から感情、これまでの身体の異変と動揺、不安、怒り、逃れようのない現実に対する恐怖など、様々な気持ちがあることにはありました。そんな苦しい中にもかかわらず、親に対する礼儀や感謝の言葉も書き添えられていました。この時ほど、親として何もできなかった自分を情けなく、恨めしく思ったことはなかったです。でも「怜のことを何とかしてあげなくてはいけない」と感じて、その晩は夫と怜のことを話し合いました。「怜が私たちの子どもであることは何クリニックを探し、この後の人生はまっ

すぐ自分がしたいことができるように見守ってほしい」と、私たちの気持ちはずっと決まりました。翌朝、怜にしっかりと向き合ってもらえました』

怜 親に直接伝えようとしたんですが、なかなかタイミングが合わないし、何か話したらいいのかもわかりませんでした。自分がどういう時から違和感があったのか、当時ブログを通じて知り合いに交際していた一ツ年上の彼女の存在、これからどういう生き方をしたいかななどを、便箋6枚くらいの手紙に書きました。

進学が決まっていた看護師の専門学校には新しい自分として通いたく、親に伝える最後のチャンスだと思いましたが、でも僕の周りの当事者は親に反対された人が多かったので、きっと僕も同じで家から追い出されるのではないかとまで思っていました。

手紙を直接渡すことができなくて、母の入浴中にこっそり母の鏡台におきました。母の部屋は僕の隣だったので、壁に耳を当てて様子をうかがっていたら、手紙を読んだ母の泣く声が聞こえました。自分は親不孝だと絶望して僕も泣けてきて、親に伝えたことを後悔しました。でもその後、母が父に「怜は怜で、これからも自分たちの子どもだし何も変わりたくないよね」と言ってくれました。僕は、親が絶対受け入れてくれないと思いついていたので、予想外の母の言葉が本当にうれしくて、希望を感じました。

—親がカミングアウトを前向きに受け止めることは、現実にはなかなか難しいですよ—

怜 好意的な反応をもらえること

はめつたにないようです。でもあの時、親から「頭がおかしい」とか「気持ちが悪い」とか「出ていけ」と否定されていたら、僕は絶対傷ついて、もしかしたら自殺していたかもしれません。自分がこれから先の人生を堂々と生きていけるか、あるいは周囲に隠してずっと悩み苦しみ続けるか。あの時の親の言葉が、分岐点になりました。

両親は「自分たちが生きている間は、支えられることがある」と思うから、もつと頼ってね」と言ってくれました。それまで、どれだけ悩んでも相談できなかったのですが、やっと親に助けを求めてもいいのかなと思えるようになりました。親にだけは理解してもらいたかったし、もし、親に見捨てられたら生きていけないと思っていたので、ものすごくうれしかったですね。

大切な人に寄り添うということ

母 『怜は、私たちが変な嫌悪感を抱かず自分のことを見てくれると感じたとき、安堵したと思います。もちろん、理解者は一人でも多いほうがいいですが、まずは親が見守っていることがとても重要だと思いました。カミングアウトの後は、悩みの原因が分かったので、寄り添うような語り口になりました。』

夫は、口数は少ないけれど思いやりのある人なので、何も言わなくても視線や態度で怜にはわかったと思います。クリニックにも必ず付き添ってくれまし



取材中

た。

急に態度や言葉を変えたというより、お互い徐々に歩み寄る感じでした。怜もそんな私たちの対応に少しずつ安心し、気持ちを隠さずに言うようになりました。』

親戚や祖父母へカミングアウト

怜 当時ちょうど従兄弟の結婚式を控えていて、両親も相当悩んだようですが、「あなたのことを考えたら、やっぱり伝えておいた方がいいね」と親戚に電話で、「今後は治療もするから、結婚式に怜はスーツで出席するよ」と事情を説明してくれました。おかげで、式当日はスーツ姿の僕にも驚かずにすみました。

祖父母には、両親が事前に家に招いて、僕の手紙を読んでもらいました。祖母は泣きながら「怜が生きているだけでいいのよ」「今まで辛かったと思うけど、怜が幸せになってくれたらそれだけでいいんだからね」と言ってくれました。

その言葉もすぐうれしかったですね。

僕は、祖母世代からはきつと拒絶されるから、むしろ真実は隠したほうがいいのではと思っていました。特に祖父は孫娘の僕をとてかわいがってくれていたの、内心は相当ショックだったと思うのですが、大事な孫だからと受け入れてくれました。

周囲の態度を当事者は観察している

—ご両親は、バラエティ番組の差別的なネタを面白がるタイプではなかったようですね—

怜 もしそういう人たちだったら、たぶん僕が親に秘密を打ち明けるタイミングはもっと遅かったか、もしかしたらずっと言えずにいたかもしれません。身近な存在の人たちだからこそ、何気ないひと言がとて心に響きますから。

—周囲の人の考えや態度を当事者は常に観察しているのですね—

怜 専門学生時代に、今でも仲のいい地元の友だちがトランスジェンダー当事者のことを否定的に話しているのを聞きました。自分のことを悪く言われているような気がして、こいつらには絶対言えないし、言いたくないと思いましたね。何年後かに謝ってくれたから今はもういいんですけど。逆に、性的マイノリティに対して肯定的な発言をしている人には、自然と自分のことを打ち明けやすいです。

公衆トイレは当事者の悩みの種

怜 進学先の看護師養成専門学校には、同じ学年に男子学生は僕を含めて三人しかいませんでした。構内のトイレ

は女性用と男性用だけで、ユニバーサルトイレがなかったの、外見上はまだ女性だった僕はとても困りました。他の男性と鉢合わせしないように、授業を抜け出して用を足したり、人気がない遠い校舎の男性用トイレまで走っていました。

トランスジェンダー当事者の入院受け入れ制度を確立したい

怜 男性看護師として病院に就職し、医療者となった僕がこうして人前で話をする理由の一つは、トランスジェンダーを見える化し、これから病院が当事者の患者の入院に適切に対応できるように、声を上げていかななくてはいけないと感じているからです。入院中の当事者は本心を伝えるに、自認する性別で入院生活を送られなくても我慢してしまいがち。だから、病院が希望を聞き、患者が望む性別での入院を受け入れる制度が必要ですよ。

当時の自分に伝えたいこと

—現在は周囲に男性として受け入れられ、看護師の仕事も当事者としての活動も充実した毎日を送っていますね—

怜 実は今年11月に、職場の先輩と結婚することになりました。パートナーの両親も、僕の事情を知ったうえで「でも怜君は怜君だから」と、人間として受け入れてくれたので、すごくありがたいと思います。最近、ハワイでの結婚式や友人を招いて地元で開くパーティーに向けて、準備をする毎日です。中高生の頃は、まさか自分が結婚できるとは思ってもいませんでした。

—当時の自分に、現在の自分から言葉をかけていたら何と伝えたいですか?—

怜 「ちゃんと前を向いて歩けば、幸せが待っているから大丈夫だよ」って言いみたいです。

—話を聞いていて、怜さんが前を向いて歩き続けることができたのは、怜さんの両親、親戚、友人、先生方、みんなが怜さんを好意的に受け入れてくれたからで、その結果、現在の怜さんの幸せがあるように感じました—

怜 性同一性障害に理解がある人ばかりではないので、苦しいこともいろいろありました。周囲の支えがあったから、ここまでこられました。本当に感謝しています。

当事者やその周囲の方へ

—性的マイノリティ当事者やその周囲の方にメッセージを—

母 『当事者への反応は、確かに以前よりも理解あるものとなりました。テレビや新聞をチェックし、様々なLGBTX(その他)の方々の生き方や思いを拝見しています。皆同じ人間で、そこに生きづらさや偏見、差別があるのはおかしな話です。人は千差万別、一人として同じ人間はいない。けれど人は人。皆同じ人間だから。思いやりのある世界を目指していけたら...と思います』

身近にはいないと思っているあなたへ

—「自分の周りにはLGBT当事者はいない」と思っている人へ、伝えたいこ

とはありますか?—

怜 LGBTの人たちは悩みを隠しているのを見えにくく、いないものにされてしまいがちです。だからといって、「知らない」とか「身近にいない」と言われるのはつらいです。そんなあなたの日頃の何気ない言動で深刻なダメージを受けて、当事者は自分の存在価値を見いだせなくなったり、生きる喜びを感じられなくなったり、居場所がなくなってしまう。気づかないかもしれないけど、実は近くにいるんだと意識するだけで、日ごろの態度や発言は変わると思っています。

当事者はこの人ならばと認めた相手にしか、本当の自分を見せません。当事者から悩みを相談された人は、信頼できる相手と認められたということです。

—ではいつの日か私が当事者から大切な秘密を打ち明けられることがあったら、あの養護の先生や怜さんの両親のように、ただ受け止めて話しを聞きたいと思えます—

※本インタビュー全文を静岡県男女共同参画ポータルサイト「あざれあナビ」で公開しています。

